

親の「テレビリテラシー」と乳児のメディアライフ： 語彙の発達も含めて

飽戸 弘・酒井 厚・菅原ますみ

1. 現代人にとってテレビとはなにか

数あるメディア媒体の中で、テレビほど私たちの生活に深く浸透しているものはない。日々送られてくる情報は、私たちの好奇心を刺激するものである。しかし、テレビ放送技術の進歩に伴い、得られる情報が多様化し肥大化していくにつれて、必要な情報をどのように取舍選択するか、与えられた情報をどう解釈するかは視聴者にますます委ねられていくように思われる。

いわゆる“テレビの見方”は、世代によっても異なってきた。10数年ほどまえの青年層のテレビの見方について稲増（1991）は、チャンネルをしばしば切り代える彼らを「フリッパーテレビ族」と呼び、そのチャンネル操作は見たいテレビ番組を決めかねているのではなく、実はより積極的に選択していると解釈し注目を集めた。最近行われたNHK放送文化研究所（白石・井田, 2003）による「テレビ50年調査」によると、こうした「断片的なテレビの見方」をはじめとして、「感情と直結したテレビの見方」「生活環境に溶け込んだテレビの見方」「番組を深読みするテレビの見方」「番組や出演者に対してリアクションするなど友達と雑談しているようなテレビの見方」などの「現代的なテレビの見方」が若年層だけでなく幅広い年層にも広がっていると報告されている。また、テレビの見方に関することとしてテレビ番組に対する信頼感があげられる。最近の戦争報道などで“情報操作”という視点が話題になったことから、最近ではメディアに対する信頼感が問われるようになってきた。テレビが提供する情報への信頼感の高低がテレビの見方に影響するという知見もある（横山・米倉, 2003a; 横山・米倉, 2003b）。

以上から、本研究ではこうしたテレビの見方やテレビへの信頼感を「テレビリテラシー」として総称し、「現代的なテレビの見方」が顕著である20代から30代の世代の「テレビリテラシー」について検討する。また、最近では子どものテレビ接触と心理社会的な発達との関連についての議論が盛んであるが、乳児期の子どもにとって、テレビに接するかどうかは親が決定しているといっているであろう。中でも、親の「テレビリテラシー」は、乳児がテレビに接する機会を与えることにつながる要素となり、間接的に子どものテレビ接触と心理社会的な発達との関連に影響を与えるものと思われる。本研究は、平成14年2月～7月に川崎市で生まれた乳児とその保護者を対象とした縦断調査研究である“子どもに良い放送”プロジェクトの3時点目（Time 3）の調査に参加した1095名のデータをもとにしている。これらのデータに基づき、親の「テレビリテラシー」と子どものテレビ接触量や語彙やメディアリテラシーの発達との関連について検討する。

2. 「テレビリテラシー」の個人差

親のテレビの見方を測定する尺度は、NHK放送文化研究所（白石・井田, 2003）が作成した「現代的なテレビの見方」の15項目を提示し、あてはまる項目に○をつけてもらった。信頼感については、著者が作成した5項目（“全くあてはまらない”～“非常によくあてはまる”までの5段階）によって測定した。

まず、全20項目を用いて因子分析を行なった。その結果、テレビへの信頼感を測定する5項目が1つの独立した因子を構成し、テレビの現代的見方の中で複数の因子が抽出された（表1を参照）。そのため、テレビの現代的見方の15項目のみを使用した因子分析を再度行なった。その結果、表2のような5因子が抽出された。

第1因子は、「家に帰ると、とりあえずテレビをつける（とりあえずテレビ）」、「テレビは水や空気のようなものだ（水や空気）」、「ただ何となくテレビを見ている（なんとなくテレビ）」の3項目から構成されていた。これらの項目は、テレビはもう必需品として空気のような環境の一部になっていると解釈されたため、「テレビは環境」因子と命名した。第2因子は、「テレビを見ていて、画面につっこみを入れる（ツッコミをいれる）」、「テレビを見ていて、世の中には許せない人がいると感じる（許せない人）」、「番組の裏側や裏話に興味をひかれる（裏側や裏話）」の3項目から構成されており、テレビの裏を知っており、番組を見ても突っ込んでみることができる、テレビ“通”の度合いを測定する因子と考えられた。そのため、「テレビ熟練」因子と呼ぶことにした。第3因子にまとめられたのは「番組を通しで見るのではなく、見たいところだけを見る（見たいところだけ）：逆転項目」と「番組の展開を予想しながらみる（展開を予想）」の2項目であった。これらの項目は、テレビの展開を予想しながらテレビにどっぷり浸かってテレビを見ていることを表すものと考えられ、「テレビへの没入」因子とすることにした。第4因子は、「テレビを見ていて、たまっているストレスを発散する（ストレスを発散）」、「バラエティ番組に出ているタレントを身近に感じる（身近に感じる）」、「友だちと雑談しているような気楽な番組がよい（友達と雑談）」の3項目から成り、友達と雑談するようにテレビで対話し、ストレスが発散できるという内容であると考えられることから「テレビとの対話」因子とした。最後の第5因子を構成するのは「テレビを見ていて、元気をもらったような気になる（元気をもらおう）」、「美しい映像や音楽にひかれて、思わず見る（思わず見る）」の2項目であり、これらの因子項目はテレビから元気をもらい思わず見てしまうことを表しているものと思われ、「テレビからの激励」因子と命名することにした。

表1 「テレビリテラシー」項目の因子分析結果：現代の見方とメディア信頼度の両者から

	1、メディア 信頼 1	2、環境	3、熟練	4、対人	5、激励	6、メディア 信頼 2	7、没入
22-4, とりあえずテレビ	-0.02	0.59	0.01	0.09	0.01	-0.03	0.01
22-5, 何となくテレビ	0.01	0.37	0.06	0.11	-0.07	0.04	0.01
23-1, 水や空気	-0.09	0.56	0.03	-0.02	0.06	-0.02	0.06
24-3, ツッコミを入れる	0.05	0.06	0.51	0.05	-0.10	0.02	0.08
24-4, 許せない人	0.01	0.09	0.41	0.03	0.16	0.07	0.04
23-4, 裏側や裏話	0.00	0.07	0.32	0.17	0.02	-0.08	-0.01
24-2, ストレスを発散	-0.02	0.06	0.00	0.43	0.07	-0.13	0.04
23-6, 友だちと雑談	-0.02	0.04	0.03	0.32	-0.01	0.08	-0.01
23-3, 身近に感じる	0.01	0.02	0.15	0.38	0.02	-0.04	0.06
24-1, 元気をもらう	-0.13	0.04	0.15	0.16	0.62	-0.02	-0.06
22-3, 思わず見る	-0.01	-0.11	0.27	-0.06	0.23	0.03	-0.04
22-1, 展開を予想	-0.01	-0.05	0.30	0.13	0.09	-0.15	0.48
22-2, 見たいところだけ	0.02	-0.09	0.04	0.00	0.09	-0.08	-0.45
23-5, 絵文字や文字	-0.04	-0.03	0.21	0.07	0.10	-0.11	0.00
23-2, 面白ければよい	-0.05	0.10	0.17	0.20	0.04	-0.01	-0.01
25-1, 事実ありのまま	0.71	0.02	0.03	0.02	-0.01	-0.09	0.00
25-2, バランスよく伝える	0.69	-0.07	0.02	-0.07	0.00	-0.04	0.00
25-3, 権力に立ち向かう	0.54	-0.07	-0.07	0.03	-0.14	0.08	-0.07
25-4, 知りたいこと伝える	0.49	-0.02	-0.09	-0.08	0.04	0.51	0.06
25-5, 信頼している	0.68	-0.02	0.06	-0.06	-0.04	0.34	0.01

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法、a 8 回の反復で回転が収束しました。

表2 「テレビリテラシー」項目の因子分析結果：現代の見方の項目から

	1、環境	2、熟練	3、没入	4、対話	5、激励
22-4, とりあえずテレビ	0.59	0.01	0.03	0.09	0.00
23-1, 水や空気	0.58	0.00	0.08	-0.03	0.08
22-5, 何となくテレビ	0.37	0.09	-0.03	0.12	-0.09
24-3, ツッコミを入れる	0.04	0.52	0.10	0.05	-0.07
24-4, 許せない人	0.08	0.42	0.01	0.02	0.17
23-4, 裏側や裏話	0.06	0.29	0.05	0.17	0.08
22-2, 見たいところだけ	-0.09	0.00	-0.29	0.01	0.13
22-1, 展開を予想	-0.06	0.23	0.69	0.14	0.16
24-2, ストレスを発散	0.05	-0.02	0.05	0.43	0.09
23-3, 身近に感じる	0.01	0.14	0.06	0.42	0.01
23-6, 友だちと雑談	0.04	0.04	-0.02	0.30	-0.01
24-1, 元気をもらう	0.06	0.12	-0.06	0.15	0.58
22-3, 思わず見る	-0.10	0.24	-0.02	-0.06	0.27
23-2, 面白ければよい	0.11	0.16	0.03	0.17	0.10
23-5, 絵文字や文字	-0.03	0.19	0.03	0.07	0.14

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法、a 7 回の反復で回転が収束しました。

3. 親の「テレビリテラシー」と子どものテレビ接触量との関連

つぎに、作成された親の「テレビリテラシー」の各因子と子どものジャンル別テレビ接触量および視聴量との関連について検討した。表3に示した結果をみると、「テレビは環境」因子がすべてのテレビ接触量および視聴量の変数との間に有意な正の相関があるのがわかる。このことから、テレビを空気のような存在と感じている親のもとでは、子どもは様々なジャンルのテレビ番組に接する機会が多いといえよう。また、興味深いことに、「テレビへの没入」因子だけが「子ども向け」番組の接触量および視聴量との間に有意な関連が認められていなかった。このことは、親がテレビにどっぷり浸かって見ている家庭では、子ども向け番組を見ている家庭と見ていない家庭が分散していることを示している。つまり、「テレビへの没入」因子の高い親のなかには、自分の見たいテレビ番組を優先し、子どもに向いているであろう番組を点けていない人が少なからずいるといえよう。「テレビへの没入」因子と正の相関が認められた子どもの視聴番組が、「ドラマ・映画」番組や「バラエティ」番組であったこともこれを裏付けていると思われる。

表3 親の「テレビリテラシー」とジャンル別テレビ接触量・視聴量との相関

	テレビ 接触量	ビデオ 接触量	総教育 講座接触量	総ニュース 報道接触量	総バラエティ 接触量	総アニメ 接触量	総ドラマ 映画接触量	子ども向け 接触量
環境	.34**	.11**	.16**	.14**	.32**	.10**	.22**	.16**
熟練	.17**	.02	.08*	.03	.20**	.09**	.11**	.09**
対人	.13**	.06	.12**	-.02	.19*	.02	.03	.12**
激励	.08**	.03	.11**	.01	.05	.02	.06	.10**
没入	.07*	.04	.01	.01	.06	.08*	.11**	.04
信頼	.11**	.04	.10**	.11**	.08*	-.00	.07*	.07*

	テレビ 接触視聴量	ビデオ 接触視聴量	教育・教養 視聴量	ニュース 報道視聴量	バラエティ 視聴量	アニメ 視聴量	ドラマ・映画 視聴量	子ども向け 視聴量
環境	.21**	.10**	.12**	.06*	.19**	.08*	.14**	.14**
熟練	.18**	.01	.08*	.05	.19**	.09**	.13**	.10**
対人	.14**	.08**	.13**	-.01	.15**	.04	.02	.14**
激励	.08*	.03	.09**	.03	.03	.01	.06	.08*
没入	.07*	.03	.01	-.00	.07*	.07*	.09**	.04
信頼	.06*	.04	.08*	.05	.03	.02	.00	.07*

** p<.01, *p<.05

4. 親の「テレビリテラシー」と2歳児の表出語彙数との関連

それでは、こうした親の「テレビリテラシー」は、子どもの心理社会的な発達とどのような関連があるのでしょうか。今回は、とくに子どもの語彙の発達に注目し、2歳時点での表出語彙数に関わる要因についての検討を行なった。

表4は、「2歳時の表出語彙数」とそれに関連することが予想される諸変数との相関を示している。関連予想変数として用意したのは、①属性変数（月齢と性別）、②母親の「テレビリテラ

表4 2歳児の表出語彙数と説明変数間の相関

	月齢	性別	環境	熟練	対人	激励	没入	信頼	テレビ	ビデオ	屋外	絵本	語彙数
月齢													
性別(男性=1, 女性=2)	.01												
環境	-.02	.03											
熟練	.04	.03	.11**										
対人	-.01	.00	.10**	.11**									
激励	.06*	-.05	-.01	.19**	.08**								
没入	.05	.05	.05	.16**	.09**	.02							
信頼	-.01	-.06*	.07*	-.01	.06	.10**	.03						
テレビ接触視聴	-.04	.06*	.21**	.18**	.14**	.08*	.07*	.06*					
ビデオ接触視聴	.01	-.10**	.10**	.01	.08**	.03	.03	.04	-.08**				
屋外あそび	.07*	-.01	.08*	-.04	-.02	.03	-.03	-.04	-.03	.03			
絵本読み	-.03	-.01	-.04	-.03	-.04	-.02	.01	-.03	-.08*	-.10**	.12**		
2歳時点での表出語彙数	.23**	.18**	-.05	.02	-.06	.11**	-.01	-.09**	-.05	-.18**	.01	.12**	

** p<.01, *p<.05

シー」関連変数、③子どもの生活時間に関する変数であった。つぎに、これら諸変数間の相互の関連性を考慮し、各変数が子どもの表出語彙数にどれだけの影響を与えているかを相対的に比較するため、「2歳児の表出語彙数」を目的変数、他の関連予想変数を説明変数とする階層重回帰分析を行った。第Iブロックは属性変数（月齢と性別）、第IIブロックは母親の「テレビリテラシー」関連変数、第IIIブロックはテレビ視聴や絵本読み時間などの子どもの生活時間に関する変数で構成されている。表5は、全ての変数を投入後（最終ステップ）の結果である。これを見ると、2歳時点での表出語彙数を有意に予測していたのは、子どもの「月齢 ($\beta = .20$)」と「性別 ($\beta = .19$)」、母親の「テレビリテラシー」変数の「テレビからの激励 ($\beta = .14$)」とメディアに対する「信頼 ($\beta = .07$)」、子どもの「ビデオ接触視聴 ($\beta = -.17$)」、「絵本読み ($\beta = .10$)」であった。この結果から、月齢の高い子の方が低い子に比べて、また女子の方が男子に比べて語彙数が多いという属性による違いが認められた。また、母親の「テレビリテラシー」との関連につい

表5 2歳時点での表出語彙数に影響する要因の検討：階層重回帰分析（最終ステップ）

		2歳時点での語彙数		
		β	調整済みR ²	R ² 変化量
Block 1	月齢	.20**	.08**	.08**
	性別(男性=1, 女性=2)	.19**		
Block 2	環境	.01	.09**	.02**
	熟練	-.01		
	対人	-.02		
	激励	.14**		
	没入	.00		
	信頼	.07*		
	テレビ接触視聴	-.06	.13**	.04**
Block 3	ビデオ接触視聴	-.17**		
	屋外あそび	-.01		
	絵本読み	.10**		

** p<.01, *p<.05

ては、「テレビからの激励」の得点が高いか、またはテレビへの信頼感が高い母親の子どもほど語彙数が高いことが示されていた。さらに、子どものメディア接触量との間では、ビデオ視聴の多さと子どもの語彙数の低さとの間に関連が認められ、絵本読み時間の多さと語彙数の多さとの間に関連が認められていた。

5. 子どもと親のメディアリテラシーと子どものメディア接触量との関連

さて、乳児期にあっては子どもが積極的にテレビ番組を見るというのは想像し難く、子どもがどんな内容の番組をどのくらい長く接するのかは親のコントロール下にあるということができよう。しかし、乳児の観察や親による統計調査からも示されているように、乳児は物としてのテレビには自発的に関わることがいわれている。こうした物理的にでもメディアを自発的にコントロールしようとする態度を乳児期のメディアリテラシーとするならば、それにはどのような特徴があるのでしょうか。また、このメディアリテラシーは乳児のメディア接触量や親のメディアリテラシーとはどのような関連があるのでしょうか。ここでは乳児期の子どものメディアリテラシーに関する探索的な研究の結果を紹介したい。表6は、子どもの物理的なメディアリテラシーとして用意した4項目について、母親による回答を子どもの性別に比較したものである。その結果、「ビデオ操作」のみに関して「できる」という回答した人の割合が女子より男子で有意に高かった。

表6 子ども「メディアリテラシー（自発的なメディア機器の操作）」項目の性差

テレビスイッチを	入れられる	入れられない	計	テレビチャンネルを	替えられる	替えられない	計
男子	534人 (98.2%)	10人 (1.8%)	544人 (100%)	男子	253人 (46.5%)	291人 (53.5%)	544人 (100%)
女子	461 (97.7%)	11 (2.3%)	472 (100%)	女子	220 (46.6%)	252 (53.4%)	472 (100%)
計	995 (97.9%)	21 (2.1%)	1016 (100%)	計	473 (46.6%)	543 (53.4%)	1016 (100%)

ビデオ操作が	できる	できない	計	テレビゲームの操作が	できる	できない	計
男子	196人 (36.0%)	348人 (64.0%)	544人 (100%)	男子	35人 (6.4%)	509人 (93.6%)	544人 (100%)
女子	132 (28.0%)	340 (72.0%)	472 (100%)	女子	22 (4.7%)	450 (95.3%)	472 (100%)
計	328 (32.3%)	688 (67.7%)	1016 (100%)	計	57 (5.6%)	959 (94.4%)	1016 (100%)

また、表7は、子どものメディアリテラシー項目と親の「テレビリテラシー」因子、および子どものテレビ・ビデオ接触量との関連を検討したものであるが、これをみると、母親の「環境」因子と子どもの「ビデオ接触量」との間に正の相関が、「ビデオ接触量」と子どもの「ビデオ操作」との間に正の相関が認められた。これらの結果から、テレビを空気のようにあたりまえの存在と思っている親は、ビデオを子どもがいるときに流していることが多く、親のすることを真似したがる子どもは、そのうちに親のビデオ操作を学習していくということが考えられる。

最後に、今回はあくまで探索的な検討にとどまったが、今後は親のメディアリテラシーと子ど

ものメディアリテラシーなども含めた様々な発達との関係について、より詳細に検討していくことが必要であろう。

表7 子どもと親のメディアリテラシー変数とテレビ・ビデオ接触量との相関

テレビスイッチ	スイッチ	チャンネル	ビデオ	ゲーム	テレビ接触	ビデオ接触	環境	熟練	対人	激励	没入	信頼
テレビチャンネル	-.02											
ビデオ操作	-.06*	.25**										
テレビゲーム操作	-.03	.12**	.11**									
テレビ接触量	.03	.05	-.01	-.02								
ビデオ接触量	-.03	-.06	.17**	-.03	-.04							
環境	.01	.06	.05	.03	.34**	.11**						
熟練	.05	.01	-.03	.06	.17**	.02	.11**					
対人	.04	-.01	.04	.03	.13**	.06	.10**	.11**				
激励	.05	-.00	.09**	.03	.08**	.03	-.01	.19**	.08**			
没入	-.00	.03	-.00	-.02	.07*	.04	.05	.16**	.09**	.02		
信頼	.00	-.01	.05	-.01	.11**	.04	.07*	-.01	.06	.10**	.03	

引用文献

- 稲増竜夫 1991 フリッパーズ・テレビーTV文化の近未来形 筑摩書房：東京
- 白石信子・井田美恵子 浸透した『現代的なテレビの見方』－平成14年10月「テレビ50年調査」から放送研究と調査, 53, 26-55
- 横山滋・米倉律 2003a 同居する「信頼」と「批判」－「日本人のマス・メディアに関する意識」から 放送研究と調査, 2003, 2-25
- 横山滋・米倉律 2003b マス・メディアに対する「信頼」の構造－「日本人のマス・メディアに関する意識」調査の再分析から 放送研究と調査, 2003, 36-51